

主人を讒言したる崇りならん、と諸人こぞって憎みける。

その後、子息喜四郎今年十三になりけるが、君へ御見参入れ奉らん、と華やかに装束して親子諸共、馬に乗り、供人数多引き具して湊をさして登りける、ここに下荊林の後を通りける時、西の方より黒雲一群見えけるが、忽ちに飛び来り、雲の中より二丈余りの光り物頭われ、小和田親子が間へ、閃きは恐ろしかりける事どもなり。小和田親子が泄て行くべき道もなし、進退ここに極まりて互いに目と目を見合わせ、既に腹を切らんとする所に、雲の内より、我こそ五郎が亡魂なり、汝、罪なき我を讒し、刺手に掛け我を討ち、恨み骨髓に徹したり、たとえ奈落の底へ逃るともよもや許しておくべきか、と云うと思えば、百千万の雷の落ち来たる声して、小和田親子を掻い掴みずたずたに引き裂き、今は本望達したり、ああ心地よや、という声ばかりは有明の、くるる霞もなかりける。

そのほか一丈余りの光り物尾頭を頭わし、三十余り飛び廻り往来の者を悩ましけるは、身の毛もよだつばかりなり。殊に小和田の従類・眷属残り少なく此所や彼所にて蹴殺されけるは、恐ろしくともなかなか申すばかりはなかりける。

愛季公、五郎が靈魂祭り給う事

かくて愛季公、弥生三日の御祝儀とて御一門を始めとして、みなみな御前に伺候ある。

助殿仰せ出されけるは、さてもこの頃、悪風片時も止む事なし、これはいかなるゆえならん、と仰せける。

一座の人々御尋ねなれば申し上げる。過ぎし頃、寒風山より大なる光り物飛び廻り、下荊林の辺にて小和田親子を掴み裂き、その上往来の者を悩ますゆえ、日暮になると人通り止まり候なり、殊に悪風片時も止む事なし、万民の歎き、国の煩いこれひとえに五郎が靈魂のなす所なり、と人民歎き申すなり。

助殿聞こし召し、何、盛末が分として何の恨みあつて靈魂仇をなさん事いわれなし、と誠に思し召されける。人々御返事にも及ばず赤面してぞ居たりける。

既に日も暮れ方になりしかば、助殿の御後に立て置きし屏風の上に、五郎が首頭われ出で、からからと打ち笑い、さあ小敵は亡したり、これより大敵を思いのままになさんこそ嬉しや心地よや、と呼ばわつてかき消す如く失せにける。一座の人々大いに驚き門外を見れば、さもすさまじき光り物、その数三十余り飛び下り、どつとおめきささわぎける。